
コナンと哀の中学生生活

音符

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コナンと哀の中学生生活

【Nコード】

N1270F

【作者名】

音符

【あらすじ】

元の身体に戻れなくなったコナンと哀は中学生になった。そしてコナンは哀に告白して…………。

第一話（前書き）

この小説はコ哀ですっ^^多分凄いらぶらぶになると思うので大丈夫な方だけ読んでみてください（>人<）

第一話

組織を倒したコナンと哀は中学生になっていた。

なぜ中学生かというと、コナンと哀にA P T Y 4 8 6 9の解毒剤に対する抵抗力が付いてしまい元の身体に戻れなくなったからだ。

そしてコナンは蘭が結婚した為、哀と一緒に阿笠邸に住んで居た。

〇。〇。〇。〇。〇。

「江戸川君、朝ごはん出来たわよー!」

「ああ、今行くよ」

哀はコナンの希望からコナンのことを江戸川君と呼んでいる。

朝ごはんを食べ終わり、二人はいつものように登校した。

「おはよーっ!」

と歩美達が話し掛けて来る。二人も

「おはよう」

と返して席に着いた。

中学の授業は二人にとって凄く簡単なものだったが、お互い中学生活を楽しんでいた。

〇。〇。〇。〇。

学校が終わり家に帰ると二人はコーヒーを飲みながら話していた。

「江戸川君……」

「何だ？灰原」

「貴方を工藤新一に戻せなくてほんとにごめんなさい。私がもっと早く解毒剤を作っていたらこんな事には……」

「いいんだよ。俺も今の生活は結構楽しんでるし」

哀は未だにこの事を引きずっている。俯き落ち込んでいる灰原をみてコナンは思わず哀を抱きしめた。

「えっ江戸川君！？」

「灰原…その事はもう気にすんな。俺は全然気にしてないから」

「でも……っ！？」

何かを言おうとした哀の唇をコナンが塞いだ。

「江戸川君っ！？」

「気にすんなって言っただろ？それにおめえ、もしかしたら俺がまだ蘭の事を引きずってるのか思ってるだろ？」

「えっ……違うの……？」

「やっぱりそうだったのか。俺は今蘭の事は何とも思っちゃいねえ。俺は………灰原、おめえの事が好きなんだよ！」

突然の告白だった。哀は少し迷ったが

「ほんとに、私なんかでいいの？」

と聞いた。コナンは

「おめえじゃなきゃ嫌だ」

と言ったので哀は頬を赤くして

「ありがと……私も貴方が好きよ／＼／」
と返した。

こうしてコナンと哀は恋人同士になった。

第二話

今日は土曜日。学校は休みである。しかも博士は学会で四日間居ない。

コナンはこの土日に哀との仲を更に縮めたいと考えていた。

「灰原。今日二人でどこか出掛けないか？」

「別に構わないわよ」

「よし。じゃあトロピカルランドでも行くか」

コナンは哀と一緒にトロピカルランドへ向かった。

○。○。○。○。○。

「灰原、何から乗る？」

「何でもいいわよ」

「じゃあジェットコースターからな」

コナンと哀は30分程待ち、ジェットコースターに乗った。

「しかし人がたくさん居るわね」

「じゃあさ、あれなんてどうだ？人も少ないし」

そう言ってコナンはお化け屋敷を指差した。

「そうね。行きましょ」

コナンと哀はお化け屋敷に入った。

歩く度に”ばあ”と脅かしてくる。哀はいつの間にかコナンの手を思い切り握っていた。

「灰原……あの…大丈夫か？」

「えっ……何が？」

「だっておめえ俺の手を…」

「あつ、ごめんなさい」

哀は手を離そうとしたがコナンが

「それくらいいいよ」

と言って哀の手を握り返したので哀も

「／／／ありがと」

と言い、素直にコナンの手を握った。

そうして二人はお化け屋敷から出た。

お化け屋敷を出たコナンと哀はお昼ご飯を食べていた。

「灰原、はい、あゝん」

「ちよっ……何するのよこんな所で！／／／／」

「いいだろ。俺達恋人同士なんだから」

「／／もう。しょうがないわね」

哀は顔を赤くしながらもコナンに従った。

その後二人は少し散歩をして、最後に観覧車に乗る事にした。

「あのさ、はいば…」

「ねえ…」

コナンが何か言いかけたのを哀が遮った。

「なんだ？」

「その…苗字じゃなくて、名前で呼んでくれない？／／／」

哀は少し頬を赤くして言った。

「えっ」

「だから、灰原じゃなくて…哀って呼んで／／／」

「／／分かったよ……哀」

コナンが哀の事を名前で呼ぶと哀は微笑んで

「／／／ありがと……コナン君？」

とコナンの事を名前で呼んだ。

そして二人は見つめ合うと唇を重ねた。

第三話

トロピカルランドに行った次の日の朝。哀は昨日のお礼にコナンに何か美味しい物でも作ってあげようと本を見ながら考えていた。

「んー、何がいいかな…」

その時コナンが部屋に入ってきた。哀はコナンをびっくりさせようと思っていたので慌てて見ていた本を隠した。

「哀、朝ごはんまだか？」

「あつ、ごめんなさい。ちょっと待ってて」

哀は台所に走っていった。コナンは哀の様子がおかしいような気がしたが、そのまま台所へ行った。

（はあ…びっくりした。ばれたかと思ったわ）

哀はとりあえず朝食を作る事にした。

「コナン君、朝ごはん出来たわよ」

「サンキュー」

哀とコナンは朝ごはんを食べてソファでくつろいで居た。コナンは推理小説を読んでいて、哀は朝考えていた事の続きを考えていた。

（あつ、そうだ！これならきっとコナン君も喜んでくれるわ）

哀はコナンの大好物のあのお菓子を思い出した。

しかしコナンが居るこの場所で作ったらこの計画がばれてしまう。

そこで哀は少しの間コナンに家を出ていてもらう事にした。

「あの、コナン君…」

「何だ？」

「ちょっと買い物に行って来てくれないかしら？」

「ああ、いいよ」

「ありがとう。じゃたこれお願いね」

「えっ、こんなに！？」

哀は出来るだけたくさんのもを書いた。

「お願い…」

「わかった。じゃあ行つて来るよ」

コナンは家を出て行つた。哀はさっそくお菓子を作り始めた。
(っ、コナン君喜んでくれるかな？)

哀はコナンの反応を楽しみにしながらお菓子を作っていた。

—— 一時間後

「出来たっ、コナン君早く帰って来ないかな…」

哀はそんな事を考えながらコナンの帰りを待つて居た。

——三十分後

「ただいま…哀？」

哀の返事が無く心配になったコナンは急いでリビングへ向かった。するとそこにはソファで気持ち良さそうに寝ている哀の姿が。

コナンはふっ、と微笑むと買ってきた物を冷蔵庫に入れようと台所に行った。

そして入れ終わりリビングに戻ろうとしたコナンは、テーブルの上に置いてある物に気付いた。

コナンが近付いて見みると、そこには

” Thank you A i t o C o n a n ”
と書かれているレモンパイが置いてあった。

「哀…」

コナンは微笑むと哀の居るリビングへ向かった。

コナンがリビングに戻ると、哀はまだ寝息を立てていた。

そんな哀を気付かってコナンはタオルケットを持って来て哀に掛けた。

そしてしばらく哀の寝顔を見つめていると哀が目を覚ました。

「ん…」

「起きたか、哀」

「こ、コナン君！？いつ帰って来たの？」

「三十分くらい前かな」

「えっ…じゃあテーブルの上のあれ見たの？」

「あれ…？…ああ、レモンパイの事か」

「うん…昨日のお礼にと思って」

「そうだったのか。ありがとな／＼」

コナンは照れたのか少し頬を赤くして言った。

哀はそんなコナンを見てとびきりの笑顔で微笑んだ。

哀の笑顔を見て更に顔を赤くしたコナンであった。そしてコナンをからかいたくなった哀は

「もしかしてコナン君、照れてるの？」

と言ってみた。コナンは慌てて

「バ、バーロ…なんじゃねーよ／＼／＼」

と言って後ろを向いた。

「クスッ…やっぱり照れてるんじゃない。」

「違っつつつてんだろ…！！／＼／＼」

哀が笑いながらそう言つとコナンもむきになって言い返してきた。
まさに夫婦漫才だ。

（こんな事してもこの鈍い探偵さんにはかなわないわね）

そう思った哀は後ろを向いたままのコナンに抱き着いた。

「！？哀…？」

コナンは以外な哀の行動に驚いている。

「ごめんなさい、私…。貴方の反応が可愛くてつい……」

するとコナンは哀の手をそつと外して正面を向き哀を抱きしめた。

「こコナン君！？」

「哀…俺の方こそ悪かったな…」

「いいのよ。それよりレモンパイ…食べてみてよ」

「ああ。サンキューな」

「はい」

哀がレモンパイを切り分け、コナンに渡す。

そして一口食べたコナンは

「…うまいっ！今まで食べた中で一番だ！！」
と笑顔で言った。

「ほんとに…？ありがとう」

こうして今日一日が終わった。

第四話

「コナン君、早く起きてよお！学校遅刻しちゃうよ！？」

哀は寝ているコナンを起こそうとしていた。しかしコナンは全然起きようとしない。

仕方なく哀はコナンの耳元で

「起きてくれたらキスしてあげる」

と言った。その言葉にコナンは飛び起きた。

「もっつ！コナン君ってば」

哀はそう言いながらもコナンの唇にそつと口付けた。

「……………これだけか……？」

「……………バカ。当たり前でしょ？それよりほらっ、支度しないとほんとに遅刻しちゃうわよ？」

「あっ、やべー！ー！」

コナンはそう言って部屋を飛び出していった。

○。○。○。○。○。

「あっ、哀ちゃんおはよー！どうしたの！？遅刻ギリギリだよ？」

「おはよう。コナン君起こすのに手間取っちゃって」

哀は息を切らしながら言った。

「だから悪かったって言ってんだろ、哀」

コナンも哀同等息を切らしながら言った。そんな二人に歩美は「ちよつと待って！何で二人共名前で呼び合ってるの？」と聞いた。

「あれ？言ってなかったっけ？俺達恋人同士なんだぜ」

コナンの言葉に歩美は驚いた。

「ええっ！！ほんと？哀ちゃん」

「ええ、本当よ」

「そっか。二人共これからも仲良くね！！」

「ああ」

「ありがと、歩美ちゃん」

そんな話を話していると先生が来て授業が始まった。

〇。〇。〇。〇。

放課後、コナンと哀はある場所に寄り道をする事になっていた。その場所とは、哀とコナンの家の横、工藤邸である。

なぜ工藤邸かというと、工藤邸には数多くの種類の本が置いてあるからだ。コナンはともかく哀までが小説を読みたいと言ったので、本がたくさんある工藤邸に来たのだ。

「コナン君……悪いけどあの本取って貰えないかしら」

そう言つて哀は一番高い所にある本を指差した。

「いいよ。ちょっと待ってろ」

コナンは脚立を持って来ると上り始めた。

だがコナンの身長では一番上までは手を伸ばしてもギリギリだった。

「哀、この本でいいか？」

コナンがそう言った瞬間、脚立がぐらつと揺れた。バランスを崩したコナンは脚立から落ちてしまった。

「つつてえー！！」

「だ、大丈夫コナン君！！??」

哀がコナンの顔を覗き込む。

「あ、ああ。大丈夫だ。それより、はい、本」

コナンは哀に本を差し出す。

「ありがと。でも良かった。貴方に何かあつたら私……」

哀は安心したのか泣き出してしまった。そんな哀を見てコナンは哀

を抱きしめた。

「コナン、君…？」

「哀…悪かったな。心配かけちゃって」

「いいの。それに貴方は悪くないわ。私が本を取って欲しいなんて言っただから…」

哀は更に落ち込んでしまった。するとコナンは哀を抱きしめていた手を離すと、そつと哀に口付けた。

「！？…ん…んん…」

コナンは唇を離すと

「いいから。気にすんな」

と言った。哀は素直に受け止める事にし、

「ありがと、コナン君」
と言った。

それから二人は手を繋いで家まで帰った。

第五話（前書き）

微妙に15禁要素が含まれていますっ！！苦手な方は読まないほうが……

第五話

コナンと哀は先日工藤邸に引越しをした。博士がそう進めてくれたからだ。

〇。〇。〇。〇。〇。

いつものように学校に登校したある日。

コナンは哀の様子がおかしい事に気付いた。

「哀、おめえどうかしたのか？」

「…えっ……何が？」

「だっておめえ顔色わりいぞ？早退するか？」

「だ……大丈夫よ！変な心配かけてごめんなさい…」

哀はそう言つと自分の席に戻つて行つた。

（ふう……全く。あの名探偵さんにはかなわないわね）

実は哀は朝から自分の体調がおかしい事に気付いていた。だが、コナンに心配をかけたくなかったため、いつも通りに振る舞っていたのだ。

そして授業が始まった。

〇。〇。〇。〇。〇。

学校が終わり、コナンと哀はいつものように仲良く帰っていた。
しかし哀は足がふらついてきてコナンにぶつかってしまった。

「あつ……ごめん、なさい……」

「哀、やっぱおめえ体調良くないんじゃない……」

「だ、大丈夫よっ！！私なら全然元気だから、ねっ」

哀は無理に明るく言うと、早足で行ってしまった。
そして家についた。

「哀、やっぱ顔赤いぞ？熱でもあるんじゃないのか？」

「……大丈夫、だつて、言ってるでしょ……！あつ、そろそろ……夕食の準備、しなきゃ。……ちよつと、待っててね……」

哀はだるい身体を何とか立ち上がらせた。……が、急に目眩が酷くなり倒れてしまった。

「哀……！おい、しっかりしろ！哀っ……！」

コナンは哀の額に自分の額をくっ付けた。

「おい……凄い熱じゃねえか！」

コナンは哀を抱き上げると、寝室まで連れていった。

「哀、ちよつと待ってるよ！」

そう言い残してコナンは部屋を飛び出して行った。

十分くらい経ったころ、コナンが戻って来た。哀はさっきよりも苦しそうに荒い呼吸をしている。

コナンは冷たいタオルを哀の額にのせた。

「哀、大丈夫か？起きれそうか？」

「……………う……………」

哀はうんと言ったつもりだったが、声にならない声になってしまった。

「……………哀、口開ける」

哀は言われた通りに小さな唇を開いた。

すると、柔らかいものが哀の唇に触れて温かい水と小さい固体が口の中に流れ込んで来た。

コナンはそのまま哀の口を塞ぐと、水と固体を飲み込ませた。

「……………んう……………う……………」

それからコナンは布団を掛け直すと、ベッドの横のイスに座って哀の様子を見ていた。

しばらくして哀が目を覚ました。

「……………ん……。コナン君…私……………」

「哀っ！！大丈夫か！？」

「…うん。さつきよりは楽に、なつたわ…。」

けれど哀はまたベッドに倒れ込んでしまった。

「哀……無理すんなよ？もう少し寝てろ」

「うん。あと…さつき薬飲ませてくれてありがと…。」

「／／／いいんだよ。でもどうして言ってくれなかったんだよ」

「……貴方に…」

「え？」

哀の声は凄く小さくてコナンは聞き取れなかった。

「貴方に…心配掛けたくなかったのよ…」

哀は消えるような声で言った。しかし、今度はコナンも聞き取っていた。

次の瞬間、コナンは哀の唇を息も出来ないくらいに深く塞いだ。

「！……んう……ん……う……うう……うん……」

コナンがやっと唇を離すと哀は苦しそうに息をしていた。熱のせいとコナンのせいとで、赤くなった頬と潤んだ瞳の哀は、コナンでなくても綺麗だと思うだろう。

「……コナン、君……。今は、だめよ……。……風邪……移っち

やうわ……」

哀は未だに荒い息遣いをしていて、途切れとぎれに言った。

「いいよ。そしたら哀の風邪が治るかしんねえだろ？」

「……………バカ……」

コナンは哀の短い一言を聞くと、また哀に口付けた。それは何百回と繰り返された。

そしてその日は二人一緒のベッドで仲良く眠った。

○。○。○。○。○。

次の日。哀の風邪はすっかり良くなっていた。

「コナン君……昨日は心配掛けてごめんなさい。あと……いろいろとありがとね／＼／」

哀は少し照れながら言った。

「いいんだよ、おめえが元気ならそれで。」

コナンは哀に笑顔を見せた。その時……
チュッ

哀がコナンにキスをした。驚いたコナンは見開いた目で哀を見た。

「／／／今のはお礼よ！／／／」

哀は照れ隠しなのかわざと大きい声でいった。

そしてその日も二人は仲良く過ごした。

第六話

哀が熱で倒れてから数日後。

今度はコナンが熱を出してしまった。原因は多分あの時のキスだろう。

「もう。だからあの時、今はだめ、って言ったのに」

「でも哀の風邪、治ったじゃねえか」

「それより大丈夫？さっきより顔赤いみたいだけど」

哀は心配そうにコナンの顔を覗き込みながら言った。

「大丈夫だよ、これくらい。それよりおめえ、そろそろ学校行かねえと遅刻すんぞ」

コナンは哀に風邪を移さないように早く家を出るように言った。だが哀は

「でも……貴方一人にしておくともた無茶しそうだから……」
と言っている。

「倒れるまで溜め込んでたおめえが言う事か？俺の事はいいいからさっさと学校行ってこい」

コナンがそこまで言うので哀は学校に行く事にした。

「コナン君。ちゃんと寝てなきゃだめよ。分かった？」

「分かってるよ」

コナンが返事をする。哀は部屋を出て行った。

○。○。○。○。○。

「おはよー哀ちゃん！！あれ、コナン君は？」

「おはよ。彼なら風邪ひいて家で寝てるわ」

「ええっ！コナン君風邪ひいたの？大丈夫？」

「ええ。軽い熱だから」

そんな話を話していると授業が始まった。

（早く学校終わらないかな…コナン君大丈夫かな…）

哀はコナンの事ばかり考えていた。

○。○。○。○。○。

放課後。

「じゃあばいばい、哀ちゃん！コナン君にお大事にって言っといて

ね！」

「あれ？いつもならお見舞いに来るのに……」

「だってコナン君、哀ちゃんと二人の方がいいと思うんだもん！」

そう言って歩美は走っていった。

「もう、歩美ちゃんってば／＼／」

哀も走って家に帰った。

家に帰ると哀は真っ先にコナンの部屋に向かった。

「ただいま。大丈夫、コナン君？」

「あ、哀……お帰り……」

コナンの様子が明らかにおかしい。

「コ、コナン君！？どうしたの？大丈夫？」

「ああ……だ、大丈夫だ。ちょっと喉が痛いだけだから」

哀はコナンに駆け寄り、自分のおでこをコナンにくっ付けた。

「やだ……熱上がってるじゃないっ！……ちょっと待っててね」

そう言っただけで哀は部屋を飛び出して、棚から薬を取りだすと温かい水

と一緒にコナンの所に持って行った。

「コナン君！薬持って来たわよ。今飲ませて上げるからね」

と哀は言ったが、コナンは哀に風邪を移してしまおうと思い、

「だ、大丈夫…夫。……自分で…飲める、から…」

と言った。そして起き上がるうとしたが、身体が思うように動かないくてベッドに倒れ込んでしまった。

「そんなでよく大丈夫だなんて言えるわね。薬くらい飲ませて上げるから」

「……そんな、事したら…おめえに、風邪が…移っちまうだろ……」

コナンがそう言うのと哀はため息を付いた。

「私がそう言った時に言う事を聞かないでキスして風邪をひいた貴方に言われたくないわ。ほら、口開けて…」

コナンは少し迷ったが、哀に従った。

そして哀は水と薬を口に含み、コナンに飲ませた。

「……………ん…」

「…じゃあちゃんと寝ててね。私ご飯作って来るから」

「ああ。…わりいな……哀…」

「いいのよ。それに私が風邪ひいた時は貴方がやってくれたでしょ。あと、歩美ちゃんがお大事になって」

哀はそう言つと部屋を出て行つた。

そして台所に向かいコナンの為に卵粥を作り始めた。

「…うん、上手にできた♪」

それから哀は喉が痛いのによく効くはちみつレモンを作りコナンの部屋へ戻った。

「はい、お粥。あと貴方喉が痛いつて言つてたからはちみつレモンも」

「…哀…サンキュ………」

「自分で食べれる？」

「………食べさせて、くれる、のか………？」

「ふっ………当たり前じゃない。ほら、あぐんして」

哀は小さい子供をあやすように言つた。コナンは素直に従つてきた。

「………これ、うまい！………さすが、哀………」

コナンは凄く嬉しそつだ。哀は頬を赤くしながら微笑んだ。

「／／／ありがと。あとはしっかり寝てなさい」

そう言つて哀は部屋を出ようとしたが、コナンが哀を呼び止めた。

「………哀…今夜、一緒に、寝て…くれないか？」

コナンは優しい哀に甘えなくなったのだ。

「／／／えっ！？……ふふっ、いいわよ。じゃあお風呂入って来るわね」

哀は甘えてくるコナンが可愛くて仕方がなくなり、コナンの言う事をきくことにした。

「コナン君、おまたせ」

数十分後、哀が戻って来た。コナンはまだ少しだるい身体を起こすと、哀の手を引っ張り、自分の横に寝かせた。

「ちょっと……貴方寒くない？」

哀はコナンを気遣い、ベッドの隅に行こうとしたが、コナンが哀を抱きしめてきた為動けなくなってしまった。

「コ、コナン君？」

「寒くなんかねえよ。それに、おめえの身体、温けえし……」

コナンは更に哀にくっ付いてくる。

「もう……しょうがないわね」

哀はコナンの背中に手を回し、ぎゅっと力を込めて

「おやすみ、コナン君」
と言って眠りについた。

○。○。○。○。○。

次の日の朝。

哀は腰に違和感を感じて目が覚めた。

「……ん……あ、そう言えば私、昨日コナン君と一緒に寝たんだった」
哀は昨日の事を思い出しながらコナンの寝顔を眺めていた。しばらくするとコナンが目を覚ました。

「おはよ、コナン君。調子はどう？」

「おはよう。哀のおかげですっかり良くなったよ。……ん？なん
でおめえ俺の布団に居るんだ？」

「なんでって、貴方が一緒に寝たいって言って私を布団に引きずり
込んだんでしょ」

少し驚いたような顔のコナンに哀は冷静に答えた。

「そうだったっけ？まあいつか。哀と一緒に寝れたし／＼」

「／＼／＼／……もう、しょうがない人ね。でも……私も貴方と寝れて
嬉しかったわ。……ねえ、また一緒に……寝てもいい……？」

「／＼／＼／えっ？……ああ、もちろん」

コナンと哀はお互い顔を真っ赤にして言った。

第七話（前書き）

ちよつとえっちなかもしれませんが、読んで頂けたら嬉しいです（／
／。／。／。）

第七話

偵丹中学は夏休みに入っていた。

コナンと哀は一週間で宿題を終わらせてのんびりと夏休みを過ごしていた。

「哀…ひまだ」

「あら、奇遇ね。私もそう思っていたの」

「どっか出かけるか？」

「この暑さで？」

現在米花町の気温は35 を超えている。

「じゃあ父さんの部屋で小説でも読むか？」

「いいわよ。どうせやる事もないし」

コナンと哀は小説を読む事にした。そしていつの間にか夕方になっていた。

「あつ、もうこんな時間！夕食の準備しなくちゃ」

哀は走って部屋を出て行った。

しばらくすると

「コナン君、ご飯出来たわよ」

と哀がコナンを呼びに来た。

「今行くよ」

哀とコナンは仲良く夕食を食べた。
そして寝る時間…。

「おやすみ、コナン君」

「おやすみ、哀」

コナンと哀はそれぞれの部屋に行った。

しばらくすると哀の部屋のドアが開いた。

「コナン君…どうしたの？」

「ちょっと寝れなくてな。おめえこそまだ起きてたのか」

「ええ。私も眠れなくて」

「じゃあさ…一緒に寝ないか？」

「……ええ、いいわよ」

コナンと哀は一緒にベッドに寝転んだ。そして今まで遭った事の話をしていた。

「——それにしても、貴方あの時はやり過ぎよ」

「あの時？」

「ほら、私が風邪で倒れた時…貴方いきなりキスしてきたでしょ？それも息が出来ないくらいに。私あの時ほんとに死ぬかと思ったのよ」

「ああ、あれか。そんなに苦しかったのか？でもそこまで抵抗しなかったよな、おめえ」

「身体が思うように動かなかったのよ！」

「ほんとか？」

コナンは意地の悪い笑みを浮かべている。

「／／ほんとよ！！」

哀は顔を赤くしながら言い返した。

「そこまで言うなら……………もう一回してみるか？」

「えっ…！？」

コナンはそう言うとき哀の手を押さえ付けて、あの時と同じように…息も出来ないくらいに口付けた。

「……………ん……………ん……………ん……………」

しばらくして、コナンはゆっくりと唇を離した。哀は苦しそうに息をしている。

「ほら、やっぱり抵抗して来ないじゃないか」

コナンはまた意地の悪い笑みを浮かべて言った。

「……貴方に…抵抗なんて…するわけないじゃない…」

哀は本音を言った。

「ほんとか？……じゃあもう一回…」

コナンはまた激しく哀に口付けた。今度のキスは長かった。けれど哀は抵抗しないでコナンを受け入れている。

「……コナン君………ちょっとは…手加減、してよ…」

哀は涙が溜まった目でコナンを睨み付けた。しかしそんな顔で睨まれても、コナンは怖くも何ともない。むしろ愛おしいと思っていた。

「じゃあ、手加減したらいいのか？」

「……バカ。もう、えっちなんだから」

「そうだ。俺はえっちでDSなんだよ」

コナンは言い終わると、服の上から哀の身体を触り始めた。

「／／／ちよっと！…何処触ってるのよ！…」

哀は講義の声を上げたがコナンはやめようとしな

「哀……」

「あ、ちよつと…そんなに、やめ……くすぐったいってば…」

それでもコナンはやめようとしな

「だめよ、コナン君。私達まだ身体は中学生よ…」

「分かつてる。そこまではしねえよ」

「ほんとかしら？しかも明日出校日よ？」

「大丈夫。キスマークは付けねえから。…見えるところにはな」

そういつてコナンは哀の肩に口付けた。哀の身体がビクツとゆれる。コナンが唇を離れたそこにはキスマークが付いていた。

「コナン君……」

「じゃあ、おやすみ。哀」

そう言うつとコナンは先に寝てしまった。

「もう…コナン君てば………おやすみ」

哀も眠りに就いた。

最終話（前書き）

ついに最終話ですっ〇（
がとっございましたっ><

（〇今まで読んで下さった方、あり

最終話

偵丹中学校の出校日の日の朝。哀はいつものように朝早く目が覚めた。コナンはまだ隣で寝ている。

哀は布団から出ようとしたが、コナンが哀に抱き着いていた為、身動きがとれずにいた。

仕方なく哀はコナンを起こす事にした。

「コナン君、朝よ。起きて」

「…ん。哀、おはよう。今何時だ？」

コナンはかなり眠そうだ。

「5時よ」

「5時い！？おめえ何でそんな時間に俺を起こすんだよ？」

「貴方に抱き着かれてて布団から出られなかったからよ」

「そうだったのか。悪かったな」

「いいのよ。それよりコナン君まだ眠いでしょ？時間になったら起こしてあげるから寝てていいわよ」

「ありがとう、哀」

哀はコナンに布団を掛け直すと部屋を出て行った。

哀は朝ご飯を作り始めた。

〇。〇。〇。〇。〇。

暫くして朝ご飯が出来上がった。そろそろコナンも起こさないといけない。哀はコナンの部屋へ向かった。

「コナン君、そろそろ起きて」

「……ん……哀。もうそんな時間か」

コナンと哀は朝食を食べて、仲良く登校した。

〇。〇。〇。〇。〇。

学校では特にやる事もなく、長い校長の話を聞いて下校した。

〇。〇。〇。〇。〇。

コナンと哀はお昼を喫茶店で済ませて帰宅した。

家でコナンと哀は座って話していた。コナンは哀の肩を抱いていて、哀も大人しくコナンの肩に頭を乗せている。

「哀、俺…おめえと出会えて本当に良かった」

「…？。急にどうしたの？」

「どうもしねえよ。ただ、そう思ったから」

「そう。…私も貴方に出会えて良かったと思ってるわ」

哀はそう言って微笑んだ。その綺麗さと可愛さに、コナンの鼓動が早くなる。

「…哀………」

「きゃっ！コナン君！」

いつの間にかコナンは哀を押し倒していた。哀は突然の事に目を見開いていた。

「…コナン君？」

「……………」

コナンは黙って哀の口を塞いだ。

「？……んう………」

「いきなりごめんな？俺…おめえが同じ気持ちでいてくれた事が嬉しくてつい……っ！？………」

「コナンの話を聞いていた哀は突然コナンに口付けた。

「……哀……？」

「私も…貴方が同じ気持ちでいてくれた事、凄く嬉しいわ」

「哀……いや、志保。これからもよろしくな？」

「うん。こちらこそよろしくね？」……新一君？」

二人は初めてお互いの本当の名前で呼び合った。

そして長く深いキスをした。

その後、高校を卒業した二人は無事結婚して、幸せに暮らした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1270f/>

コナンと哀の中学生生活

2010年10月10日15時07分発行